

どに強調点をおいている。実際、人間の深層心理におけるフロイトのエディプス・コンプレックスの原理は基本的には非歴史的に定式化されており、そこから、各歴史社会にそれぞれ特徴的なジェンダー関係の展開をあきらかにすることは困難であろう。そこで、欧米の後期マルクス主義フェミニズムは、家父長制を歴史的に発達し変化する社会制度とそのイデオロギーとして取り扱っているのである。

たとえば、その代表的理論家とされるハイジ・ハートマンとブリジスによれば⁵⁾、家父長制は資本主義の出現するはるか以前から存在していた。私的家族のなかで、男性はヒエラルキー的組織や支配の様式、技術を学び、それを中央集権的な経済秩序や公的領域に適用していった。その公的領域がやがて資本主義に変わっていったのである。家庭内での家父長的支配が、資本のもとでの賃労働における性的分業による抑圧的ジェンダー関係にももちこまれることとなった、とみるのである。そこに、資本家のみでなく、男性労働者にも責任を問いかけている側面があり、その面では、資本主義以前のジェンダー関係についての見方は異なるものの、先のイリイチの労資結託論に意外に近くなるところもなくはない。

この文脈でみて、後期マルクス主義フェミニズムの貢献を、宇野学派の伝統に積極的に摂取して段階論の再構成の重要な契機としたR・アルブイトン『資本主義発展の段階論』は、最近の収穫であり、

ジェンダー論の分野でも注目されてよい作品といえよう。そこでは、宇野三段階論の方法を踏襲して、純粋資本主義を扱う原理論にはジェンダー問題は入らないが、原理論を考察基準として、資本主義の世界史的發展段階をあらためて、重商主義段階、自由主義段階、帝国主義段階、およびコンシュマリズム段階の四段階に区分して再構成するさいには、従来の宇野学派の段階論にはこれまでみられなかったようなジェンダー関係についてのかなり本格的な考察が組み込まれている。すなわち家父長制は、資本主義にはるかに先だつて形成された社会的慣行であり、資本主義にもその慣行は重商主義段階以来、政治的、法的、経済的なジェンダー差別として根強く引き継がれてきている。一六世紀から始まった資本主義の歴史的発展のなかで、既婚女性が法的人格としてみずからの財産を所有し扱えるようになったのは最先進国でも一九世紀に入ってからのものであり、法的主体として投票権まで認められるようになるのは二〇世紀に入ってからのものであった。もともと、本来、ジェンダー関係に無関心な資本は、その発展をつうじ、家父長制を崩してゆく傾向も示しているが、深いところで家父長的であり続けるので、資本主義の時代のうちにその消滅を期待することはできないであろう。

ほぼこうしたアルブイトンのジェンダー論には、後期マルクス主義フェミニズムの成果を活かしながら、マルクス経済学の基本的な理論

との関係においても、マルクス派ジェンダー論の深化のために興味あるいくつかの論点を示唆しているところがある。さしあたり二つの点にはばって検討しておこう。

3 資本主義と市場経済の歴史性とジェンダー関係

すなわち、第一に、資本主義市場経済の基本原理解は、どのような意味で異なる家父長制の人間関係と共存し、これを利用し続けうるのであろうか。かりに、市場における自由で平等な取引関係が、A・スミスのいう人間に本来的な交換性向にもとづいて展開される自然の秩序であり、しかも新古典派経済学の想定するように、いわば原子論的個人主義にもとづく市場での選択行為の結果が公正で調和的な経済秩序を形成するものとみるならば、家父長制の人間関係の家族や企業内での存続は、不自然で遅れた社会的意識や慣行とみなされる反面で、そのような意識や慣行がなぜ近代以降の資本主義市場経済に根強く存続し続けることになるのかは、逆に理解しがたいことになるのではなかろうか。そこから、イリイチのように労資をつうずる男性の結託論のような一種の観念論的転倒が生じたり、マルクス主義フェミニズムにおいても、資本主義市場経済と家父長制とのあいだにたんに異なる二元論を想定するだけに終わる傾向もなくはない。

しかし、『資本論』の経済学は、市場経済を人間性や人間社会に自

然的な秩序をみならず古典派経済学を批判して、本来共同体と共同体のあいだに発生する商品の取引関係が、近代以降、労働力の商品化を介して諸社会内部の経済的編成原理に転化され、特殊な歴史社会としての資本主義市場経済を形成した論理を立体的にあきらかにするところとなつている。そこに展開される資本主義市場経済の原理は、原子論的個人主義にたつものではなく、社会がすべて平等な諸個人の相互関係に分解されて組み立てられていると前提するものでもない。たとえば『資本論』では、労働力の商品としての価値の内容をなす必要生活手段には、歴史的文化的な要素とともに、その子供の育成のための生活手段もふくまれていなければならないとし、加えて家族から複数の若者を労働市場にひきだすことにより、労働力の価値を分割し引き下げる機械装置の作用に言及し、資本主義が労働力の再生産の側面で、共同体的家族関係を変化させながら重要な社会的基礎としていることを示唆している。さらに、資本が労働力の使用価値を用いるいわば企業内の秩序は、無政府的な市場による社会的分業と異なり、専制支配のもとでの分業編成がおこなわれることを対比的に規定し、そこにも直接的人間関係が形成され維持されざるをえないことをあきらかにしている⁶⁾。

こうして、歴史社会としての資本主義は、中世以前の共同体的社会関係を解体してゆく市場経済の社会内部への浸透拡大を世界的にも国